
鬼語り

樋渡 幸

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

鬼語り

【Nコード】

N8698U

【作者名】

樋渡 幸

【あらすじ】

かつて山間に鬼の名を名乗る者たちがいた。

人の世に生まれ、人の世の悲哀を知り

鬼と呼ばれた者たちの物語。

この話には動物と話せる、密教の真言で闘うなどの能力を扱う人たちが出てきます。閲覧の際は注意して下さいますよう、お願いします。

あぐらゐの 神の御手もち

弾く琴に 舞する女

常世にもがも

古事記

息を吸い込むと夏の夜の草いきれが、ふうつと鼻の奥に入り込んでくる。近くに川があるからだろうか、螢火がひとつ、ふたつ、目の前をふうわりと横切って行った。

空気はじつとりと蒸して和伽彦わかひこの額に玉の汗を作る。

狭山の里から明保野あけほのを横切って、ほんのわずか山裾を登ったところで和伽彦の左足は痺れて動かなくなった。

それはほんの数刻前に里を抜けるとき、後を追ってきた御影衆みかげしゅうにつけられた腿の傷が原因だった。

破れた紺地の袴を血がじわじわと染めていく。傷は深くはないが、御影衆が使う？には毒が塗ってある。

今は左足だけで済んでいる痺れも時がたてば全身に回る。これはそういう毒だった。

ただ一つ和伽彦にとって幸運だったのは、その毒が死をもたらすものではなかったということだ。御影衆はどうやら和伽彦を殺さずに捕えるつもりだったらしい。

和伽彦はこんもりとした茂みにうずくまって乱れた呼吸を整えた。ここには山に不案内な里の者にだって簡単に見つかってしまうだろう。どうにかして御山の内に逃れなければ。

和伽彦は茂みを入ってきた方向とは反対に腹ばいになりながら進んで行った。茂みを抜けると一見それとはわからない獣道があった。跡が残ってしまうのは仕方ないと思いつつ狭い獣道をたどっていく。腹ばいで遅々とししか進めず、裸足なので足の裏が痛い。その上張り出した木枝が体中を引っ搔いていく。

そうしてしばらく進むと、途切れてしまいそうに小さな川に行きあった。

そうこうしているうちに血圧までさがってきたようだ。しめた、と和伽彦はぼうっとする頭で考えた。御影衆が使う獵犬もうまくやればまけるかもしれない。

御影衆は狭山の領主、斎藤一朝が使役する忍びの衆のことだ。表向きには領民と変わらぬように生計たつきを立てて暮らしていた。

狭山の領地に入って南に下ると、大きな楡が生えた一角に出る。そこには「伊兵衛」と号した屋敷があった。

伊兵衛さんと言えば、狭山の者にとっては馴染み深い大工のことで、よい仕事をする評判だ。

屋敷の主人である高崎弥太郎は当代の伊兵衛さんであり、家族以外には知らぬことながら、御影衆の頭でもある。

高崎の一族は代々御影衆として斎藤家に仕えてきた。

頭は世襲ではないが、弥太郎の死んだ父親もまた御影衆の頭だった。炉端に座り込み深く考え込んでいたため、庭に忍んできた気配にすぐに気付くことができなかった。

一瞬緊張が体に走ったが、その気配が馴染みのものだったことに気

付くと、肩の力を抜いて立ち上がった。

弥太郎は庭に面した障子戸を引くと表廊下に出た。飴色に磨きこまれた廊下の木板は、弥太郎が歩くとぎしぎしと軋む。

広くはない庭で端正な佇まいを見せる庭木は、庭師の真似ごとくする主人の趣味の良さを窺わせた。

その庭の一角に植えられた腕を低く広げた黒松の傍に、人影があった。

「荒良木^{あららぎ}か。どうした」

人影は弥太郎の補佐をして御影衆を束ねている荒良木総治だった。細面のいかにも優しげな顔立ちではあるが、目を見れば厳しい世界に生きていることがすぐさま見て取れる。

荒良木は渋柿の胴着、同色の脚絆に脛当てという御影衆の出で立ちであった。

「頭領さん、お館さまからのお達しです」

荒良木のもたらした報せにため息を一つつくと、弥太郎は座敷へと入るように促した。

弥太郎の娘、紗代が入れた茶を飲みながら、荒良木は首尾を報告した。

「要所に配置した者によると、西三軒小路から明保野へ向かう若者がいたということです」

襖を開いて現れた弥太郎は荒良木と同じような出で立ちに着替えて

いた。

「明保野？その先には何もないぞ」

明保野は狭山の西、御山へと通じる野原で、人が住めるような場所ではない。

御山は広大な山脈に連なっており、山を越えるためには南に下らなければならぬ。

しかし、明保野の南には狭山の水源ともなっている小さな湖があり、そこから南に抜けることはできない。

「おそらくは西の御山の者かと」

「……そうか。して、見かけてどうした」

「捕えようとしたところ逃げられたようですが、足に傷を負わせたそうです」

二人は伊兵衛屋敷から音もなく姿を消した。

二

英大館は狭山領内の東北にある剣術道場だった。

東北の並びには斎藤家家臣の屋敷がたち並んでいる。

十年ほど前、都で名を挙げた剣術家が師範を継いだことも相まって、家臣の子息たちは殆どが英大館に通うようになっていた。

町奉行今埜恒紀の息子、孝之助もその一人であった。町奉行である父は息子の素行に厳しく、時折窮屈な思いもしたが、暮らし向きはそれなりに裕福だった。

英大館の稽古は厳しかったが、同年代の朋輩と切磋琢磨し、己の芸を磨くというのは孝之助にとって、とても気持ちのよいことだった。剣術を始めて十余年、英大館に通い始めてもう五年になるだろうか。孝之助は気持ちにむらがあるという嫌いがあるが、十五という若輩ながら、門下の若手の中では群を抜く腕前になっていた。

埃っぽい大通り沿いの門を抜けると、入母屋の、道場にしては立派な破風が構えている。左に少し行くと井戸があり、そこで手足を洗ってから道場に入るのが習わしだった。

「進一郎。今日、萩屋へ行かないか」

雑巾がけを終えて防具を用意しながら、孝之助は幼馴染の進一郎に話しかけた。

萩屋とは南柳小路の甘味屋で、孝之助の目的は甘味ではなく、萩屋の娘はるだった。

「ああ、いいぜ。お前、今日こそは、はるさんに声をかけろよ」

進一郎はにやついてからかい、孝之助は

「うるさいな、余計な世話だ」

と返した。

竹刀の弦を締めながらそんな算段をしていたものだから、稽古も始まっていけないのに師範代の佐々木に叱られてしまった。

罰として、進一郎と二人、道場の隅で素振りをさせられていたから、入り口に見慣れぬ人影が立った時も孝之助はすぐに気付いた。

「見学でしょうか」

孝之助は木刀を脇に下げ、進み出て尋ねた。

戸口に立っていたのは孝之助とそれほど年の違わない若者で、一瞬だけ孝之助に目を向けてすぐにそらし、「そんなもんです」と曖昧な返事をした。

彼は、袖がほつれた着物に色あせた紺の袴という地味な出で立ちであつたが、顔はちよつと見ない美形だったので孝之助は驚いた。

通った鼻梁に細い顎、額は狭く、目はいささか大きな感じはしたが、それでも調和がとれている。

（家臣の息子にこんなやつがいたんだろうか…）

それなりに狭い政治の世界で、同年代の者を知らぬということはない。

「御客人か」

「あ、はい。見学希望だそうです」

思案していると、いつの間にか佐々木が近づいていたので孝之助は場を譲る。

「お名を聞いてもよろしいか」

「……………」

若者は答えない。

佐々木は相対すると圧倒されてしまうほど大きな身体である。今は若者が土間、佐々木が一段高い場所にいるので、なおさら威圧感が増している。

それを自覚してか幾分声音を和らげると再び尋ねた。

「どなたかの紹介でおいでになったのかな？」

そもそも剣術自体、武士が修めるものであり、町民に門戸は開いていない。

佐々木の問いは若者の身分を証明できるものを示せということに他ならなかった。

「…いいえ」

「そうですか。では入門はちと無理だなあ」

元来人好きのする佐々木が頭をかきながらつぶやくと、若者は頭を下げた。

「俺、わかひこと言います。和むの和、伽羅の伽で和伽彦です。今日だけでいいので一緒に稽古をさせて下さい」

結局、一日だけならと佐々木が折れる形で和伽彦の参加が許可され

た。武士階級ではないであろう和伽彦が、他流の使い手とも思えなかったからだ。

道場の隅で木刀を振る和伽彦の姿を見て、初心者ではないことが見て取れた。むしろ洗練されたその素振りは、彼の一撃がいかに重いかを物語っている。

孝之助だけでなく、道場の者たちほぼ全てが興味津々に和伽彦に注目していた。

額に浮かぶ汗までも錦絵のように美しく見えて、孝之助の胸にかすかな嫉妬の気持ち湧いた。

「これからかかり稽古をする」

佐々木の一言で、今まで打ち込みを行っていた門下生が、さっとわきよけて面を外し始めた。

夏の暑気にめいめいが滝のような汗を流し、道場の中はこもる熱で淀んでいた。

「今埜、お前が彼の相手をしなさい」

孝之助に緊張が走った。次いで頬が紅潮してきた。若手で一番の孝之助を指名したということは、佐々木が和伽彦の腕前を孝之助と同程度と考えているのだ。

孝之助と和伽彦は間合いをはかり、相正眼に構えた。

両者の間には、一本の緊張の糸が張られている。

和伽彦の剣先がわずかに動いた。孝之助は誘いに乗らず、半歩足を捌く。

知らぬうちに汗が額を、背中を伝う。

「おうっ！」

孝之助が気合いとともに鳩尾に力をためる。

周囲の者たちは食い入るように若者二人の稽古を見ている。

「しっ！」

和伽彦が伸びやかに踏み込んできた。

正面に打ちかかる和伽彦を孝之助がいなし、さらに打ち返そうとするが、下段から和伽彦に切り返され罅迫り合いになる。

両者の力は均衡しているようで、静かな、しかし激しい迫り合いの後、再び間合いが開いた。

佐々木や門下の者たちはふうっ、と息を吐いて初めて自分たちが息を詰めていたことを知った。

そして、勝負は一瞬だった。

孝之助の眼には、和伽彦が消えたように見えた。

気付いた時には天井を仰いでいた。喉に残る痛みで、突かれたのだということがわかった。

「大丈夫ですか」

と小手を外して手を伸ばしてくる和伽彦の手をつかんで立ち上がりかけた時、孝之助は息をのんだ。

和伽彦は、なんだ、大したことないんだな、という思いがありありと見て取れる目を、面金の奥から孝之助に向けていた。

心の奥が冷え冷えとしていくのが感じられた。同時に恥ずかしさと熱い怒りがこみ上げてくる。

こんなやつに、姓も名乗れない、武士でもない、どこの流派ともわ

からないやつに負けたのだ。

誇りと自尊心を傷つけられた孝之助は、竹刀を握り直すとそのまま
気合いとともに和伽彦に打ちかかった。

相手が構えてもおらず、卑怯な行為だということはわかっていた。
それでもいいから目の前の生意気なやつを叩きのめしたかった。

一瞬の後、体を捌いた和伽彦の手元から真っ直ぐに伸びてきた剣先
が、孝之助の喉を打った。

その後は、何もわからなくなった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8698u/>

鬼語り

2011年11月22日17時01分発行